

機関番号：46102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008年（平成20年）～2010年（平成22年）

課題番号：20530870

研究課題名（和文）

「フィンランド・メソッドを採り入れた英語プレゼンテーション能力育成法・評価法の確立」

研究課題名（英文）

“Establishing the Method to Develop Presentation Skills and the Criteria in Evaluating Presentations by Referring to the FINNISH METHOD of Education”

研究代表者

堀口 誠信（HORIGUCHI MASANOBU）

徳島文理大学短期大学部言語コミュニケーション学科・教授

研究者番号：30271480

研究成果の概要（和文）：200字以内

フィンランド・メソッドは「〇〇すれば〇〇の点数が何点上がる」というような、単なるハウツーものではなく、破綻した国家の経済を個々の「生きる力」で集団的に建て直そうとする理念にまで直結しているところがある。この理念に基づく観点から、コミュニケーション力・読解力などを再認識する説明手順を整え、特に英語で行うプレゼンテーションにおける採点基準をある程度まで確立し、授業の演習や学内のコンテストで活用した。（199字）

研究成果の概要（英文）：

What is called “the FINNISH METHOD of education” is not simply some kind of “how-to book” which helps one get certain high scores by following the directions written in it, but it implies the spirit to survive the terrible economic situation after the collapse of the Soviet Union in the 1990s, by solving various problems by collaborating with each other. Our research, from this point of view concerning the FINNISH METHOD, developed ways of defining “communication skills” and “reading literacy,” established how to evaluate students’ performance in English presentations, and applied this evaluation method to the classes of presentation-skill-training and the speech contests in our college.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	100,000	30,000	130,000
2010年度	100,000	30,000	130,000
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：カリキュラム構成・開発（その他：評価基準、PISA型読解力、英語教育）

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究を申請した平成19年（2007年）当時「フィンランド・メソッド」という言葉は、教育界を除けば、さほど一般には浸透していなかった。ただ、フィンランド・メソ

ッドを普及させる活動はすでに見られ、2005年頃からフィンランドの国語教科書の翻訳出版などが行われていた。

(2) 日本各地ではフィンランドの勉強法について、教育関係者、特に中等教育機関の教

員を主な対象にセミナーなどが開かれることが多くなり、世界共通の学力試験 PISA において、なぜフィンランドのような国が常に世界上位の成績をおさめているのかに関する解説がなされていた。

(3) 中等教育機関において、「PISA 型読解力」という概念は流行語のように繰り返されるようになり、特に、日本人の学生における「読解力」不足の指摘と、数年後に開催予定の PISA 2009 における「読解力問題に向けての対策」がしきりにささやかれるようになってきていた。

2. 研究の目的

(1) 大学生も含め我々が漠然と想定している「コミュニケーション力」をフィンランド・メソッドという概念を参照しながら、細かく具体的な要素に分解し、授業で行っているプレゼンテーション能力の育成という枠組みにおいて、どの要素に注目すれば自分のパフォーマンスが改善されるのか、ということについて指針を作成する。

(2) フィンランド・メソッドは「〇〇すれば〇〇の点数が何点上がる」というような、単なるハウツーものではなく、破綻した国家の経済を個々の「生きる力」で集団的に建て直そうとする理念にまで直結しているところがあり、このことをまず研究者自身が実感し、さらに大学生にもその内容を伝える。

(3) 単純にプレゼンテーションの採点基準を分類・設定するにとどまらず、大学生に対する授業その他で実際に運用し、試行錯誤を重ねながら配点調整や項目整理を行う。

3. 研究の方法

(1) フィンランドの中等教育に関する調査は先行研究が比較的多いので、これとフィンランドの英語教育に関する先行研究を合わせた中で、プレゼンテーション教育と英語教育に関連する部分を抽出する。

(2) 実際にフィンランドの教育機関を現地調査し、現場の授業スタイル、教員の姿勢、そしてカリキュラムなどを調べた（ヘルシンキ・トゥルク・タンペレ各都市の小学校・中学校・高等学校・大学・インターナショナルスクールなど）。

(3) 研究期間の3年間におけるプレゼンテーション関連科目、例えば「プレゼンテーション演習 I」（プレゼンテーション実務士に関する資格科目）、大学主催の「英語スピーチ

コンテスト」や「英語暗誦コンテスト」、あるいは授業科目以外では「オープンキャンパスにおける、高校生に対する大学生からの大学紹介プレゼン」などでプレゼンの採点基準を使って練習し、配点調整や項目整理を行う。

4. 研究成果

(1) 下図 1 は学生が練習をする際に理想的なサイクルとなるものを示したものであるが、パワーポイントなどを使ったビジネスプレゼンテーションにおいて、送り手の主体は「人間」であるため、情熱と感動を伝えて聴衆を動かさなくてははいけない。しかし、このことがプレゼンの評価に関する誤解を生みやすい。

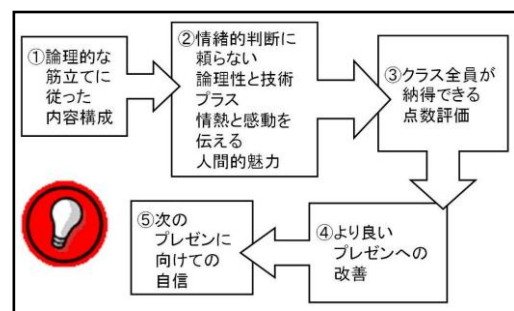


図 1：理想的なプレゼン演習の形態

すなわち、プレゼンの善し悪しに関する判断が情緒的な方向に傾きがちになるわけだが、あくまでも、論理性と技術による裏付けが必要となる。さらに、コミュニケーション全般についても、図 2 におけるような若者のコミュニケーション能力の欠落が叫ばれる中、対話型コミュニケーションの原点に戻って、発信者でなく、受信側がどう理解するか（誤解するか）を常に意識する複眼的思考が必要であるということ、プレゼン演習を行う最初の時点で強調しておかなくてははいけない。

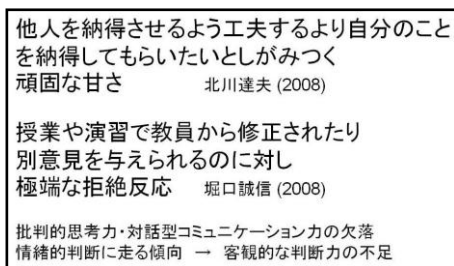


図 2：コミュニケーションの欠落

(2) いわゆるフィンランド・メソッドは対話型コミュニケーション能力の育成に定評があり、これが PISA 型読解力テストでの高得点にもつながっているとされているが、これは特に新しい画期的な概念というもので

はない。最初の主張に対し反論や補足を述べ、それらを総合してより良い主張につなげてゆく、というヘーゲル以来のドイツ哲学の弁証法を忠実に実行しているに過ぎない。

ただし、机の上の理論としてはスムーズに運ぶこの手法も、生身の人間に当てはめて実行すれば感情論による対立や利害関係による仲間割れが起き、新しいアイデアを生み出すことができない場合も多いのが実情であろう。例えば、下図3における日本の会社内での会議のように、上司が部下の意見を最初から採り上げるつもりがなく、対等な立場での議論そのものが存在しないまま、上司が部下の経験不足を指摘して終わったり、逆に、教室内で個々のバラバラな意見を好き勝手に主張させて議論のないまま「今日はいろいろな意見が出て良かったですね」と終了してしまったり、理想の状態からはかけ離れてしまっている場合が見られる。特に、日本の学校における教育では「意見をたたかわせる」ということに抵抗があるようだが、これは新しいアイデアを生み出す過程における議論と自己主張が受け入れられたかどうかによる感情的対立を混同していることになり、また、議論の練習回数が減ることによって「対話型コミュニケーション」の有効な進め方やその利点についても学生側が知る機会を奪ってしまうことにもつながる。

フィンランド・メソッドにおける対話では、
時間内に一応の妥協点を見いださないとイケない

「今回はいろいろな意見が出て、皆さんよかったですね」はダメ
(ある種、誰かの意見は敗北する)

会社の会議では上司が部下の意見を採り上げず、
経験不足を指摘して終わる(平田オリザ 2008)

議論に破れた人物が悔しいのはフィンランド人も同じだが、
これを繰り返し慣れさせる(北川達夫 2008)

**フィンランド・メソッド＝競わせない教育
など、とんでもない(受験がないだけ)**

図3：対話型コミュニケーションとは

これに対し、フィンランドにおける教室内の授業では小学校のレベルから議論そのものを繰り返し、比較的スムーズに成功させており、この点が特筆すべき部分となる。こうなるためには、議論に負けても感情的に悔しがるということをおさえる耐久性と、同じ枠内で対等の立場での議論ができるという「ルールの遵守」が保証され、不公平感が解消されていることが必要となる。さらに、ルールのもとで対等に議論している者同士の間で、論理的な解釈にズレが出てこないようにするため、全員が高い文章能力（作成能力と解釈能力）を持っていることが必要条件となる。

その点では「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参

加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」である PISA 型読解力において、フィンランドの学生が高得点を保持していることは重要であると考えられる。特に、PISA 型読解力テストで出題される「内容に対する意見・評価・批判を述べる」問題で試されているのは世界に一つしかないような独創的意見を述べたかということではなく、問題文で述べられている内容をどれだけ踏み外すことなく理解しており、それにどれだけ正確に対応した答えを導き出したかということであり、ありふれた一種類か二種類の正解しか存在しない（採点の都合からも正解が多岐にわたったり特殊なものであったりするはずがない）。

(3) 以上のことはフィンランドの教室における授業の視察で実際に確認することができた。視察した学校を以下に記す：

ヘルシンキ (Helsinki) 大学
 トゥルク (Turku) 市スウェーデン系高等学校
 トゥルク (Turku) インターナショナルスクール (小学校・中学校レベル)
 トゥルク (Turku) 大学
 アウラヨキ (Aura joki) 高等学校
 タンペレ (Tampere) 大学附属教員訓練学校 (中学校・高等学校レベル)
 タンペレ (Tampere) 大学

(4) 実際に見たフィンランドの教員の姿勢は「カリキュラムにあることを忠実にそのままに実行する」という地味で極めて当たり前のものであり、「個性的かつ情熱を持った教員がズバズバ物事を解決してゆく」という感覚とは対局にあった。また、フィンランドでの教育が現状で成功していることもあり、学生の間には教育・教員に対する信頼の強さを感じることができた（例えば、学校教育のおかげで親の世代より英語が確実にできるようになっているなど）。

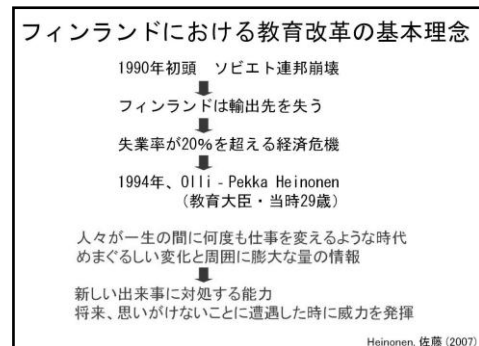


図4：社会情勢の必要から生まれた教育

また、フィンランドの教育改革は、図4に示したような社会情勢の必要性から生まれた

ものであり、崩壊した国の経済を国民の「生きる力」を結集して集団的に建て直すことにつながった訳だが、教員の側にこの認識はあるものの、学生の間には強く浸透はしていないように見受けられた（フィンランドの経済再生が1990年代だったことを考えれば、年代的に今の学生が実感を持って当時のことを思い出せないのは当然であろう）。ただし、学生は教室での勉強が社会に出て着実に役立つ、という認識を持っている。最近では日本でも経済産業省による「社会人基礎力」という言葉がよく使われるが、下図5のように、フィンランドでは学力がそのまま社会人基礎力に直結しているという認識があるということになる。

対話型コミュニケーション能力の育成
集団的問題解決能力の育成
 → PISA型読解力テストに対応(常に好成績)
 → しかも、社会人基礎力の3要素にびったり符号

①書かれた文章の徹底理解
 「考え抜く力」(thinking)の養成へ

②内容把握だけでなく、意見・評価・批判をする
 「前に踏み出す力」(action)の養成へ

③社会参加のために書かれたテキストを利用
 「チームで働く力」(teamwork)の養成へ

図5：読解力と社会人基礎力

また、フィンランドの学生の間では、日本におけるように「いくら学校で成績が良くても教室で学んだことが世間に出てから役に立つとは限らない」とか「学校では勉強をするより他にもっと大切なことがあるはずだ」といった「勉強することを手放して良いとは見なさない」考え方は見られず、「成績が良いことは無条件に喜ぶべきこと、自慢すべきこと」であり、「学校で勉強できることが他人の役にも立ち、社会を助けることにもつながる」という視点を見いだすことが多かった。このことは、裏を返せば、「勉強のし過ぎイコール人間性の否定」といった日本式の発想の方が特殊であり、これが「成績の良いことを自慢することは嫌味だ」と考えることにつながり、さらには勉強の場である学校、勉強の主導者である教員を非建設的に非難する風潮にもつながっているようにも思われる。

その他、フィンランドの学生は教室などで集団になったときに「人目を気にしてわけもなく周囲に同調してしまう」といった仲間集団圧力(peer pressure)を強く見せるなど、日本人学生と極めて似た気質を共有していることを実感できた。なるほど、1980年代の製造業全盛時にフィンランドはNordic Japanと呼ばれ、1990年代に入ると起業家教育の中心理念に日本生まれのSECI理論(SECI: Socialization, Externalization, Combination, Internalization)すなわち会

社内で暗黙知を交換し、考えを共有するという思想(野中・竹内:1995)を組み込むなど、かつての「欧米人の個人プレーに対する日本人の企業的集団的取組み」の利点を現在も継続しているような形になっている。その点でも、いわゆるフィンランド・メソッドは日本の教育で参考にしやすいものであろう。

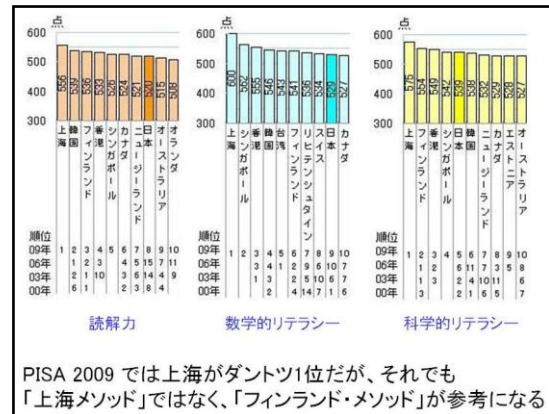


図6：PISA 2009の結果

(5) 教室内でのパワーポイントなどのスライドを用いたビジネス・プレゼンテーションの練習において、これまで述べてきたフィンランド・メソッドとりわけ読解力に関する部分からは、「発想・論理・表現」という概念(北川:2005)を参考に、プレゼンテーションで一番の核となる「構成」において学生がどんな問題点を抱えがちであるかを分類し、指示を与えやすくできる：

- 発想に問題がある場合→話す内容が
思い浮かばない
- 論理に問題がある場合→関係ない話や
例示が含まれる
- 表現に問題がある場合→話の展開で
焦点がぼける

このうち3つ目の「表現」テクニックは他の2つと異なり、即席で修正できる部分である。例えば「聴衆にふさわしい用語の選択・構成を明確にする言い回し・適切な比喻・語呂の良いセリフの活用」などで、採点基準はこれらを中心とする。また、「構成」以外の部分では「聴衆に好感を持たれる態度」から「アイコンタクト・ジェスチャー・立ち位置や姿勢」などの要素を、「話し方」から「スピード・音量・メリハリと区切り」などの要素を、それぞれ評価基準の中心とした(これらの項目分類は日本ビジネス実務学会[武田ほか:2006]を参考にしている)。

特に、練習で即効性があるのは「話し方」であるため、学生への指示に「文章を暗記するのではなく、キーワードを暗記する」「キーワードを目立たせる形で一文を言い、一箇

所あたりにかかるアイコンタクトの時間単位とする」「リハーサルには本番と同じ時間をかけ、省略しない」の3点を与えた。パワーポイントは自分の声を録音して時間配分と話し方のクセを確認できる機能がついているため、授業ではこれを多用した。

(6) 英語教育全般については、小学校3年生レベルから週2回の音読・訳読を始めて図7にあるような成果を出しているのがフィンランドである。特に、フィンランド語はヨーロッパの言語であり、アルファベットを使用しているものの、英語と極めて異質である点においては日本語と同じポジションにあり、日本人にとってはドイツ人やフランス人の英語学習よりフィンランド人の英語学習の方が参考になるはずである。現地視察の印象として1つ気づいたのは、日本と違い、初期の段階から絵やイラスト、お遊戯など学生に迎合するようなものを入れず、ひたすら語学の反復練習をしている点であった。

英語教育分野でのフィンランドの実力	
TOEFL (2004-2005年度)	300点満点
世界	平均214点
フィンランド	平均257点 (世界第4位)
日本	平均191点 (アジア29ヶ国中28位)
インド・ヨーロッパ語族ではない	
インド・ヨーロッパ語族	(英語はこのグループ)
オランダ語・ドイツ語	(ゲルマン語派で下位区分も同一)
スウェーデン語・デンマーク語・ノルウェー語	
フランス語・イタリア語・スペイン語	(イタリック語派)
フィン・ウゴル語族	☐ フィンランド語
アルタイ語族	☐ 日本語
	伊東 (2008), Gleason (1961), 北村 (1981), Geist (1970)

図7：フィンランド語と英語

(7) パワーポイントなどを使用しない英語だけの学内スピーチコンテストや、英語の文芸作品を暗記して発表する暗誦コンテストにおいても、「聴衆にふさわしい用語の選択・構成を明確にする言い回し・適切な比喩・語呂の良いセリフの活用」、「アイコンタクト・ジェスチャー・立ち位置や姿勢」、「スピード・声量・メリハリと区切り」といった基本的な採点基準は配点を工夫することによってそのまま適用できた。これらに服装上の注意点 (dress code) や英語の語法上の精度 (correct grammar and pronunciation) を適宜加えることになる。現在、「スピードや区切りなど話し方としての要素」と「英語の精度を示すものとしての発音」をどう分類するかが検討課題である。

(8) フィンランド・メソッドは最終的には「集団の問題解決」による福祉国家の存続につながる。勉強はその1部にすぎない。一方、日本では「勉強＝他人との競争」という構図

から抜けられず、競争を止めると学力も下がったという事態になっている。大学全入時代を迎えた現在、この構図に替わる新しい発想が待たれる。

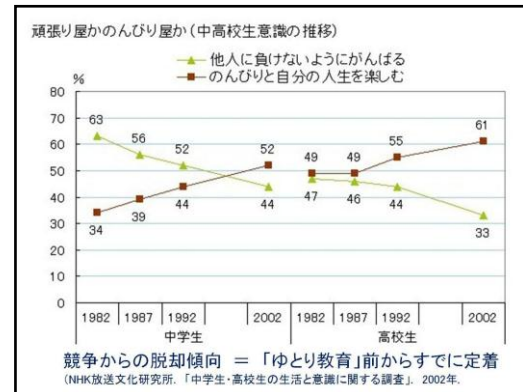


図8：競争からの脱却傾向

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

堀口誠信, 「英語教育、プレゼンテーション教育、ならびに授業運営：ハワイのコミュニティ大学視察を参考に」, 『徳島文理大学研究紀要』, 第77号, 徳島文理大学研究紀要編集委員会, 2009年, pp. 61-69.

堀口誠信, 「学生プレゼンの評価基準に関する一考察」, 『比較文化研究』, No. 86, 日本比較文化学会, 査読有, 2009年, pp. 113-124.

堀口誠信, 「いわゆるフィンランド・メソッドの本質について：日本の教育者が見誤ってはいけない部分」, 『徳島文理大学研究紀要』, 第78号, 徳島文理大学研究紀要編集委員会, 2009年, pp. 83-93.

堀口誠信, 「平成生まれの日本人大学生は『学校』をどう捉えているか：『学園ドラマ』を『社会人基礎力』の観点から分析する」, 『徳島文理大学研究紀要』, 第81号, 徳島文理大学研究紀要編集委員会, 2011年, pp. 21-30.

〔学会発表〕(計6件)

堀口誠信・藤岡克則・三浦秀松・石崎一樹, 「フィンランド・メソッドとプレゼン教育」, 同志社ことばの会・2008年度年次大会, 2009年2月11日[水・祝], 於:同志社大学・寒梅館6階大会議室.

堀口誠信. 「フィンランド・メソッドにおける集団的問題解決とは？：我々の普段の生活との接点」. 日本比較文化学会・関西支部・中四国支部・九州支部合同研究会. 2009年11月28日[土]. 於：徳島市内町公民館.

堀口誠信. 「フィンランド・メソッドと日本の英語教育」. 同志社ことばの会・2009年度年次大会. 2010年2月11日[木・祝]. 於：同志社大学・寒梅館6階大会議室.

堀口誠信. 「平成生まれの日本人大学生は『学校』をどう捉えているか：『学園ドラマ』を通じて見た彼らの基本概念」. 日本ビジネス実務学会・第27回中国・四国ブロック研究会. 2010年8月29日[日]. 於：高松大学・本館1階多目的ホール.

堀口誠信. 「社会人基礎力と学校の存在意義との関係について：平成生まれの日本人大学生が『学園ドラマ』を通じて見ている学校の姿」. 日本比較文化学会・関東支部・関西支部第1回合同研究会. 2010年9月18日[土]. 於：浜松市アクロシティ浜松研修交流センター.

堀口誠信. 「日本の教室でフィンランド・メソッドを阻んでいる要因：勉強・競争概念・そして英語教育」. 同志社ことばの会・2010年度年次大会. 2011年2月11日[金・祝]. 於：同志社大学・寒梅館6階大会議室.

[その他]

英語教育に関する論文（計2件）

三浦秀松・堀口誠信・藤岡克則・石崎一樹. 「英語診断テストの結果分析：2007年度と2008年度入学者の比較研究」. 『徳島文理大学研究紀要』. 第78号. 徳島文理大学研究紀要編集委員会. 2009年. pp. 159-172.

堀口誠信. 「英語教育に関する啓蒙活動の必要性：『英文法通りでは生きた英語にならない』に見られる誤解」. 『徳島文理大学研究紀要』. 第81号. 徳島文理大学研究紀要編集委員会. 2011年. pp. 31-43.

英語教育に関する雑誌記事（1件）

堀口誠信. 「『英文法通りでは生きた英語にならない』はもう古い：ALC NetAcademy2『英文法コース』による基礎力増強の取組み」. 『ALC NetAcademy 通信：シリーズ・英語教育とe-learning』. 第76号. 株式会社アル

ク教育社（ネット配信記事）. 2010年9月22日[水].

招待講演（計2件）

堀口誠信. 「フィンランド・メソッドとグローバルコミュニケーションの能力：競わせない教育がもたらす効果とは」. ながさき県民大学連携講座招待講演. 2009年10月17日[土]. 於：長崎外国語大学・M203教室.

堀口誠信. 「フィンランドの教育事情：競わせない教育がもたらす成果とは」. 徳島県阿南市教育委員会・生涯学習課主催招待講演. 2010年2月9日[金]. 於：徳島県阿南市ひまわり会館・21世紀室.

地域教育活動における講演：英語教育に関連したもの（1件）

堀口誠信. 「同時通訳訓練法を利用したアクティブな授業展開より：英語教育に関する解説」. 徳島文理大学主催・中学校高等学校教員英語教員免許状更新講座. 2010年8月10日[火]. 於：徳島文理大学・メディアセンター5階CALL教室、プレゼンテーション教室.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀口 誠信 (HORIGUCHI MASANOBU)
徳島文理大学短期大学部
言語コミュニケーション学科・教授
研究者番号：30271480

(2) 研究分担者

藤岡克則 (FUJIOKA KATSUNORI)
国立大学法人 愛媛大学
教育・学生支援機構
英語教育センター・教授
研究者番号：60249670

三浦秀松 (MIURA HIDEMATSU)
武庫川女子大学短期大学部
英語コミュニケーション学科・准教授
研究者番号：90389164

石崎一樹 (ISHIZAKI KAZUKI)
奈良大学
教養部・准教授
研究者番号：70330751